



地域日本語支援ニュース こだま 第 306 号

2016.10.27



★—メールマガジンをお読みいただき、ありがとうございます—★

【地域日本語支援ニュース こだま】は、日本語教育に関する事業を全国で行っている公益社団法人国際日本語普及協会(AJALT)発行のメールマガジンです。各地域で在住外国人に対する日本語・生活支援に携わっている方々に役立つ情報の共有を目指していきます。

====目次=====

1■ともに生きる■

日本語を教えることから広がる世界

神田和可子

2■高校進学進路ガイダンス情報（10、11 月）■

=====

1■ともに生きる■

日本語を教えることから広がる世界

神田和可子

ある日教会で、日本語を必要とする来日児童生徒の現状を知った神田さん。その後さまざまな出会いを通して、外国に移り住んだ人々の未来を切り開くのは「教育」だと実感、子どもの成長を目のあたりにしながら、学習支援を続けています。迷いつつ参加したボランティアをきっかけに、世界の子どもたちの役に立ちたいという強い意志が育まれていったことを知るとき、私たちもまた、そうした縁をつないでいくことの大切さを感じます。

◆ “180 度”の体験

「教会で子どもに日本語を教えるボランティアに興味ないかしら？」私は、学生時代にシスターのひよんな一言でフィリピン児童への日本語ボランティア

をする機会を得ました。その時は「ボランティアなんて……偽善的なものなんじゃない？」と半信半疑で参加しました。しかし、この体験が、私のボランティアのイメージを 180 度変え、その後の人生に大きな影響を与えてくれました。この夏休みの体験で、日本の社会には日本語を必要としている子どもたちがいるということ、ボランティアを通して人の役に立つことの楽しさを知り、日本語教師という、世界につながる職業と出会いました。

◆心が戻る場所

心には、その体験で得た感覚を抱きながらも、大学時代は日本語とは関係のない専攻に進み、部活動に励んでいましたが、ボランティアの楽しさを継続したくて、児童養護施設の子どもへの学習ボランティアを行っていました。大学を卒業後、就職をしましたが、半年が過ぎた頃、学生時代に体験した忘れられない感覚を思い出し、日本語教師という仕事で世界とつながることに挑戦したいと思い、働きながら日本語教師養成講座に通うことに決めました。一年半の講座を終え、その後、週末にマンマー難民の方へ日本語ボランティアを始めることになりました。

◆異国へボランティアに

日本語教師の資格を取得したあと、実務経験も経て、いよいよ世界へ挑戦！ JICA 日系社会青年ボランティアへ応募しました。想いは届き、2 年間ブラジルの地で日系日本語学校教師として活動することになりました。この 2 年間には、日本語教師としての活動、ブラジルの日系社会とブラジルの社会、その歴史・文化、多くの出来事や人々との出会いがありました。ブラジルの 2 年間で最も感銘を受けた出来事は、教育を受けることによって人生の選択肢を拡げ、異国の地で逞しく生きる日系移民の生き方です。

◆帰国後、再び

帰国後は、NPO で多文化の子どもへの学習サポートをしています。日本と他国の 2 つもしくは 2 つ以上の文化を持ちながら、それら複数の文化を共に育む教育環境を確保することは日本では難しいのが現状です。いじめを受けたり、もう 1 つの文化を肯定できず、日本人としてのアイデンティティばかりが育まれ、子どもたちは思春期になると揺れ動くアイデンティティの狭間で葛藤してしまうことも少なくありません。

そんな中、ブラジルで身につけてきた言語が、子どもとの距離を縮めてくれるような体験をしました。日系の中学生への英語の学習支援のためにポルトガル語を使った時のこと、隣のクラスの生徒が嬉しそうに知っているポルトガル語を思い出して話してくれたり、他の同じようなバックグラウンドを持っている生徒に誇らしげに言葉を教えてあげたりし始めました。学びを通じ、自尊感情を育む場に立ち会うことができた瞬間でした。

◆これからのこと

日本語ボランティアという小さなきっかけは、日本語教師という仕事を通じて多くの学びと出会い、世界と共に生きていることを実感する大きな気づきを与えてくれました。ブラジルでの体験から、子どもの教育に一層関心を持ち、現在は、日系人と関わる仕事のお手伝いや NPO での多文化の子どもへの学習サポートを続けながら、大学院で国際教育協力の勉強をしています。いつか、教育分野で世界を舞台に、より良い社会になるために尽くせる人になりたいと考えています。
